

あなたは、どう向き合いますか

活動をととして現場の課題に気づきます

浅野君と大木君は、4月から活動を始めて1ヶ月になりますが、それぞれの課題に直面しています。学校ボランティア活動をととして、学校の課題に他人ごととしてではなく、自分ごととして向き合い、省察し試行しながら実践的指導力を高めています。



大木君は、科学工作部員との活動がスタートしました。



担任の先生でもない、友達先生でもない、ボランティア先生の立つ位置がある！

学習しているところに入っていきにもなかなかきっかけがつかめない、どのような言葉かけをしたら良いか迷ってしまう…、難しいですね。

自分で試行しながら、一人ひとりの距離がつかめてくるように思います。それが、実感です。

生徒との距離をどうとればいいのか？

3年 大木 暁都

4月から福島第三中学校で学校ボランティアを行って来て、活動の目標であり今でも分からないことがあります。それは、子どもとの距離感です。子どもと近すぎてもただの友達先生になってしまう、けれども遠すぎると生徒にとっていなくてもいい先生になってしまいます。

子どもから「あのね」と聞かれる先生になるためにはどうすべきなのか。一人だけにかかわって回りが見えていないのではないかと考えることは日々増え尽きることがありません。

しかし、へたくそで手探りの接し方ではあるが、最近になって自分と1回しか会ったことがない生徒から「大木先生こんにちは！鏡持ってきてくれたんだ！」と言われたときは、ちょっと子どもの心に残る先生になれたのかなと思うことができました。

活動をととして、つらいことも多いけれど、子どもの素直さとちょっとした成長が見られることは、何にも代え難いものがあるのだと感じました。



渡邊さんは、子どもの目線で語りかけています。

H 君事件

3年 浅野 友輔

H 君は特別支援学級の4年生。

H 君が通常学級の子どもたちと一緒にいった消防署見学の帰り道、H 君がある児童と軽く接触してしまい、その瞬間、「汚い」という言葉が聞こえた。しかし、私はどうすることもできなかった。私はH 君が聞いていないことを願い、H 君の気をそらすようにとたくさん話しかけながら学校へと帰った。

私は、何よりもまず、子どもたちに差別的な考えがあることにひどくショックを受けた。現在、インクルーシブ教育が進められているが、子どもたちの理解という点で大きな課題があると感じた。

そして、色々と条件が悪かったこともあるが、もし発言した子に適切なアプローチをとっていればその子の考えを変えられたかもしれないと考え、その子に対してなにもできなかった自分が悔しかった。

今考えると、様々なアプローチ方法が浮かんでくるが、もしあなただったらどのようなアプローチをとりますか。



浅野君は、特別支援学級で支援をしています。



この日浅野君は、支援員が休みのために1年生の支援をしました。



宗像さんは、わきで指をさして子どもの理解を確認しています。

通常学級の子どもたちとの溝をどううめるか？

浅野君は、このあと特学の先生に相談しました。担任の先生は、「うすうす感じていて気になっていたのよ」と、話されました。

これからは、通常学級に付き添い支援をするときに、注意深く子どもたちの様子を観察して、できることからアプローチしようと考えています。

【問合せ先】 学校ボランティア支援室は、疑問、困りごと、要望、相談に応じます。

(理工107 e-mail: 齋藤幸男 ysaito@educ.fukushima-u.ac.jp

二瓶洋允 hnihei@educ.fukushima-u.ac.jp

【相談時間】 月～金(9:00～16:30)

【体験訪問】 水曜日は、保原小学校で全校『学び合い』を体験できます。